て許されなければなるまい、彼の述作の如きは、原文の儘を邦語に譯出するに、敢て譯文の臭味を帶びないであらうと思はれる程に、其の發表に文學的色彩を脆却して居る。勿論之を以て本譯書が原書に不忠實であるとは更々云ふのではない。外國語を邦語に譯出することの如何に困難なるかを、他人にも劣らず認め得ると思ふ自分に取つては、本譯書が如何に多くの點に於て敎ふる所の大であつたかは、こゝに譯者に對して謝せなければならない。殊に哲學研究就中認識論的論究述作の極めて尠少なる我が學界に取つて、かくの如き名著が譯出せられたことは誠に喜ぶべきことであると思ふ。本譯書の如きは寧ろ一個の獨立なる述作として、認識論的研究に進まんとするものゝ必讀の入門書として、推奬すべき價あるものと思ふ。兎に角先には紀平學士の認識論の著あり、今又中川學士の此好譯あり、此種の述作の陸續公にせらるゝは、此思想界の風潮の那邊に進展しつゝあるかを覩ひ得る心地して、甚だ愉快に思ふ次第である。（岡野留次郎）

國民道德要領

文學士　吉田靜致
藤本慶祐共著

歐洲戰亂に鑑みて、我が國民は戰後激烈なる國際的競爭場裡に、世界的公民として活動すると同時に、日本國民として活動するの覺悟を決めなければならぬ。然してその活動の道德的基礎は時勢に適應した國民道德であるべきであつて、國民道德の研究詮明は極めて重要であり、亦實に焦眉の急なりとして著者が平素の懷抱を、國民敎育に從事する人々の參考の爲めに著はされたものである。

我が國民道德の由來する遠き神代の昔より今に到る迄の國民道德の發達變遷をば、第一章より第七章に納めてある。第一章我が國民道德の由來、第二章祖先尊崇と家族制、第三章神道の發達、第四章儒敎の發達と其の影響、第五章佛敎の發達と其の影響、第六章武士道の發達及び其の精神、第七章敎育に關する勅語の發布の章下に現有の國民信仰が大陸傳來の印度思想支那思想に影響せられ、歷史の發展に連れて如何に特色ある國民道德が起つたかを略々歷史的に叙述し、第八章國民道德の特質に於て、我が國民道德には顯著なる二大特質――一、忠孝の一致、二、忠君愛國の一致――の存することを闡明し、最後に第九章我が國民道德の倫理學的觀察に於て學的考察に及んで居る。

一國民、一民族の道德をば歷史的に說述することは、昔に溯つて道德の事實を調べるのであるから決して容易ではないが、道德そのものゝ究明にも資するものであつて、學的價値があり此の種の研究の發表せらるゝことは願はしいことである。又時勢の要求と沒交渉でも無く、敎育者の參考にもとの著者の望みは充分に滿たされるであらう。菊版四二九頁、東京寶文館發行、定價壹圓五十錢（尾生光三郎）

宗敎哲學

文學士　石原謙著

本書は『哲學叢書』の第七編として、宗敎哲學の地位及び問題を組織的に說明せんとしたものである。著者は自序の中に『單に初學者を目的とした序論的のもの』と云つて居るが、然し宗敎哲學概論としては內容の最もよく調つたものであり、特に此方面に殆

んど全く創作的著述を缺いて居る我國の學界に於ては、其最初の試みとして至大の意義を有するものである。內容は序論に於て宗教研究の方法と本書の立場とを明かにし、本論は之を二編に分つて、第一編に哲學、神學、宗教學等種々なる宗教研究の發達、意義及び效果を吟味し、其等が何れも單獨には徹底的效果を與へないに反して、眞の宗教研究は宗教哲學の外に無いといふ立場から、第二編に入つて其宗教哲學の意義及び問題を考察せんとするのである。第一編は更らに三章に分かれ、第一章に於て宗教の一般哲學的考察を叙し、古代希臘より近代哲學者の宗教觀を精細に述べて、神秘主義や佛教の立場にまで及び、要するに自己の理性を基とする哲學の見方は本來反理性的な宗教の價値を樹立する所以ではないとする。第二章は宗教研究は抽象的概念よりは事實の宗教を主としなければならぬといふ見地から、神學に重要なる意義を認め。其種々なる態度を批評して、神學として最も理想的な新教神學の發達と其主要問題及び解釋を述べ、終に其近代學術に對する困難と可能の限界とを說明して居る。第三章には宗教の事實的統一的研究としての宗教學特に宗教史と宗教心理學の過去及び現在を叙し、宗教學は終に宗教哲學の豫備としての外獨立の價値を有しないと斷じて、次の宗教哲學に移る前提となして居る。即ち著者の考へでは哲學、神學、宗教學は皆宗教哲學に從屬して其地位を保ち得るのであるから、宗教研究の積極的說明としての本書の眼目は正しく第二編に存するのである。それで第二編即ち第四章には順を追ふて豫備的研究としての宗教心理學の意義、宗教の價値問題、宗教の歷史哲學、宗教の形而上的概念の批評等を試みて居るが、著者自ら告白して居る樣に、本書全體を通じて、又特に此章に於ける研究の順序方法及び主張の內容は共にトレルチが其根底となつて居る。從つて全體として現はれた著者自身の宗教觀念や其他の主張についても、トレルチに對すると同樣な論難、ことに其研究方法上の批評を免かれることが出來ないのであるが、然し著者の云ふやうに在來の研究の方向を說明し、現在の問題の所在を示すのが本書の目的であるとするならば、之を著者自身に向つて責める必要は無いかも知れない。ともかく本書が宗教に關する古來の各方面の思想と研究とを系統的に叙說し、諸有問題を簡潔に指摘したる點に於て、それが此方面の研究に有益なる參考資料たることは疑はれない。唯著者の所謂一般宗教の眞理價値を樹立するものとしての宗教哲學と宗教の一般哲學的考察との區別や、又宗教學の意義及び其宗教哲學との關係等に就ては尙大なる疑義を存するが、其等は更らに改めて著者の意見を質さなければならぬ。（宇野圓空）

倫理學の根本問題　文學士　阿部次郎著

本書は岩波書店發行哲學叢書の第六卷として出たものであつて、Theodor Lipps, Die ethischen Grundfragen の第二版によつて書かれたものである。否、言はゞリップスの省譯である。譯としない丈に自由がある、原著の說述法直截銳利にして、字句を逐つては譯出し難い處を原意を失はない範圍內で、或ひは取捨を行ひ或ひは言廻はしを變へられてゐる。比較的逐語的に譯出せられた處もあれば、又隨分思ひ切つて省略し又書き直された處もある。